人が人を育てる大学・北海道教育大学の学生発信マガジン　学園情報誌［ヒュー・ランドスケープ］

HUE-LANDSCAPE

面白いこと、やっています。

〈札幌キャンパス〉広がるのは空と大地と想像力 親子キャンプの魅力に迫る

〈旭川キャンパス〉大雪山麓の大学施設「六稜山荘」で展開される魅力的な教育コンテンツ

〈釧路キャンパス〉E-Lunch・天文部・酪農体験

〈函館キャンパス〉子どもと学生が触れ合う「小集団臨床」ってどんな授業？

〈岩見沢キャンパス〉岩見沢キャンパスの魅力を最大限に発信！　情報拠点i-BOXの幅広い取り組みとは？

Autumn/Winter 2018

NO.29

本誌バックナンバーは
北海道教育大学ホームページで読むことができます。

HUE-LANDSCAPE

HUE-LANDSCAPE は学生スタッフが大活躍する学園情報誌です！

川村 風花　旭川校
杉森 琉奈　旭川校
津田 光太郎　岩見沢校
秋本 結以　岩見沢校
西村 日花里　釧路校
渡辺 有紀　釧路校
稲葉 拓紀　札幌校
関口 実子　札幌校
山縣 まる子　札幌校
水口 史菜　函館校
山邊 瑞穂　函館校

編集局の E-mail ▶ landscape@s.hokkyodai.ac.jp

HUE-LANDSCAPE に関するご意見、ご感想をお気軽にお寄せください。
企画案や写真・イラストも、常時募集しています!

本誌は、本学学生である自覚を高め、有意義な学生生活と、将来への明確な目的意識の促進につながる情報を紹介するため、平成17年1月に創刊されました。

今号の発行にあたり、本誌の趣旨にご賛同いただいた企業の皆様からご支援を賜り、誠にありがとうございます。

今後とも本学学生へのご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

カネシメホールディングスグループ　カネシメ髙橋水産株式会社
札幌篠路自動車学校
札幌商工会議所
株式会社　北洋銀行
株式会社　北海道アルバイト情報社
北海道教育大学学生活協同組合
（50音順、敬称略）

HUE-LANDSCAPE
Autumn/Winter 2018 No.29

平成 30 年 10 月　発行
発行：国立大学法人 北海道教育大学
編集：北海道教育大学学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局
編集局長／宇田川耕一（岩見沢校）
編集局員／今村　彰生（旭川校）　舩岳　紘行（岩見沢校）
土岐　圭佑（釧路校）　幸坂健太郎（札幌校）
長尾　智絵（函館校）
編集協力：株式会社須田製版

国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

北海道教育大学ホームページ
http://www.hokkyodai.ac.jp/

HUE-LANDSCAPE
Autumn / Winter 2018 No.29

Contents

2 ［ 巻頭特集 ］
夢に向かって走れ!
希望を胸に日々活動する
教育大生たち(道北篇)

4 ［ 特集 ］
面白いこと、やっています。

4 札幌キャンパス／教員養成課程
広がるのは空と大地と想像力
親子キャンプの魅力に迫る

6 旭川キャンパス／教員養成課程
大雪山麓の大学施設「六稜山荘」で
展開される魅力的な教育コンテンツ

8 釧路キャンパス／教員養成課程
E-Lunch・天文部・酪農体験

10 函館キャンパス／国際地域学科
子どもと学生が触れ合う
「小集団臨床」ってどんな授業?

12 岩見沢キャンパス／芸術・スポーツ文化学科
岩見沢キャンパスの魅力を最大限に発信!
情報拠点i-BOXの幅広い取り組みとは?

14 新入生の抱負2018
16 キャンパス便り(函館校)
17 大学院生の研究紹介(札幌校)
18 研究ファイル(旭川校)
19 国際交流ニュース(釧路校)
20 キャンパス長からのメッセージ
志手 典之 先生(岩見沢校)
21 新任の先生方
22 保健管理センター発
23 INFORMATION
学園情報誌HUE-LANDSCAPE編集局から

HUE-LANDSCAPE とは?
このキャンパスから眺める今現在の風景と、これから創造していく自分と社会の風景という意味をこめてつけました。
●HUEは"Hokkaido University of Education"より

写真①

巻頭特集 夢に向かって走れ!

道北篇

希望を胸に日々活動する教育大生たち

こんにちは。本誌編集局長の宇田川耕一(岩見沢校)です(写真①)。子どもの頃から北海道には何度も訪れていましたが、前職の新聞社時代に北海道支社に赴任した際、改めて飛行機の窓から見た北海道の印象は、「これはドイツと似ているな」というものでした。私の専門はアートマネジメント(音楽)ですが、個人的にもクラシック音楽を偏愛しているので、本場ドイツ、特にベルリンにはベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会を聴きに何度も足を運んでいます。針葉樹林が多いドイツの森林は全体に黒っぽく、それが新千歳空港の回りに広がる森の印象と重なりました。

さて、前号の第28号では、「夢に向かって走れ!」巻頭特集の第1弾として、釧路校を取材しました。今回は巻頭特集第2弾として、道北の旭川校を取り上げます。旭川は道産材を使用した家具が有名ですね。針葉樹より広葉樹の方が家具材には適しているそうです。旭川校のホームページを見ると、キャンパス内の美しい樹木や洗練された校舎を背景に、「教師への夢はここから始まる。」という魅力的なコピーが目に飛び込んできます。

ただ、同じ教員養成系とはいっても、旭川校には札幌校や釧路校とはまた違った特色があるはずです。事前に調べてみると、どうやらゼミ活動に特徴があるような・・・・・・。では、さっそく旭川校で取材開始です。

写真②

旭川校に着いて最初に向かったのが、国語教育専攻の村田裕和先生〈専門:日本文学(近代)〉の研究室でした。3年生の菅原佑希さん、日永教優さんに話を聞きました(写真②、左が菅原さん、右が日永さん)。菅原さん「ゼミ生同士の発表が活動の中心で、3年生はそこで自分の研究テーマに沿って発表することが、卒業研究への準備にもなっています」。日永さん「旭川校では1年生からゼミに入ります。まだ、ステップアップの段階なので作品の要約などが中心にはなりますが、早くから慣れるという意味からも、1年生も発表しています」。

どうやら、1年生から4年間ゼミ活動をするというのが、旭川校の特色のようです。菅原さんは「宮沢賢治の研究に取り組んでいますが、例えば動物が作品に数多く登場することに注目するなど、今までとは違ったアプローチをしてみたい」と話していました。2人共小さい頃から読書が好きだったそうで、ゼミ活動で興味のあることにじっくりと時間をかけて取り組めるのが楽しいとのことでした。

写真③

村田先生にも聞きました(写真③)。「近代文学が専門なので、主に教科書に載っているような作家を取り上げています。文学作品の内容研究だけでなく、旭川市や近郊の文学館を回ったりして文学と社会が実際にどうつながっているかを見ていこうという活動もしています」。

続けて、図書館の「ラーニングコモンズ」という、学生や教職員がさまざまなスタイルで自主的な学習活動を行えるスペースに行きました。ちょうど、英語コミュニケーション学ゼミ3年生の小板橋祥記さんが発表していました(写真④)。

写真④

次に、芸術・保健体育教育専攻・美術分野の岩永啓司先生〈専門:美術分野(彫刻)〉の研究室に向かいます(写真⑤)。道産の竹を使用して、四面体を基本単位に大きな造形物を制作し、野外展示をするという取り組みが進められていました(写真⑥)。岩永先生「今までもいろいろなスタイルでの実績があるプロジェクトですが、今年度は八重樫良二先生〈専門:美術分野(デザイン)〉の研究室と共同制作で、材料と設置場所は昨年を踏襲して、段取り、形、進め方に関しては、まずやるかどうかの判断から始めて、学生の主体性を徹底的に重視しています」。

写真⑤

写真⑥

このプロジェクトのリーダーである岩永ゼミ3年生の白石拓海さん(写真⑦、左端が白石さん)も「昨年は先生方の案で進めましたが、今年度はオブジェの設計、デザインなどすべて自分たち学生がアイデアを出し合っています。それをリーダーとしてまとめるのに苦労しています」とのことでした。

写真⑦

ということで、学生の自主性が十分に発揮されているのも、旭川校のゼミ活動の柱であることがわかってきました。

最後に、教育発達専攻・特別支援教育分野の蔦森英史先生〈専門:臨床発達心理〉の研究室を訪ねました。ゼミ生が集まって、心理検査・アセスメントの実習が行われていました(写真⑧、左手一番奥が蔦森先生)。

写真⑧

4年生の田中一滉さん、3年生の錦川拓海さんに聞きました(写真⑨、前列左が田中さん、右が錦川さん)。錦川さん「ゼミ生がそれぞれ興味を持ったことを出し合って、それを取り上げていくような活動をしています」。田中さん「例えば、教室を出て外でドローンを飛ばしてみて、その前と後の心理の変化を計ってみるようなこともありました」。

写真⑨

取材中の移動でキャンパス内にある池の横を歩いていると、学園情報誌の旭川校編集局員である理科教育専攻の今村彰生先生〈専門:植物生態学〉が、ゼミの学生たちと共に、野外実習で釣った有害外来魚を焼いて食べているのに出くわしました(写真⑩)。害魚ですが、実はおいしく食べられるそうです。期せずして、何ともスケールの大きい旭川校の教育環境を、目の当たりにすることになりました。

ということで、旭川校の取材もあっという間に終了しました。釧路校に続いて、再び夢を追うたくさんの光が確かに見えた、そんな貴重な体験でした。

写真⑩

特集

面白いこと、やっています。

北海道教育大学に真面目で硬いイメージを持っている方は多いのではないでしょうか。ですが真面目は真面目でも、面白いことも大真面目にやる大学、それが北海道教育大学なのです。一体どんな面白いことをしているのか、今回の特集をどうぞご覧あれ。

広がるのは空と大地と想像力 親子キャンプの魅力に迫る

札幌キャンパス

学生と子どもたちで道にダムをつくっている様子

子どもから大人まで、大自然の中で遊びつくす。六月に行われた親子デイキャンプ「とにかく遊ぼうよ！　よいちの丘で！　２０１８春」（以下、親子キャンプ）。札幌校の平野直己先生が中心となり、年間を通して毎年開催しています。ネーミングから面白く、魅力的。今回はそんな親子キャンプについて取材させていただきました。

01 余市教育福祉村のなりたち

親子キャンプが開催されているのは、余市町の小高い丘にある余市教育福祉村です。このような体験型の環境を余市町につくった理由について、取材させていただいた余市教育福祉村理事長の菊池大（ひさし）さんは、次のように話してくださいました。「札幌に日帰りでき、海も山もあります。息子が余市町で教員をやっていたというのも大きいです。街中では体験できないようなことをここへ来て、親子でのびのびと自然体験をしてもらいたいです」

豊かな自然に囲まれ、顔を上げれば広大な空と海がどこまでも見渡せます。ベリーなどの果物やハーブ、野菜を栽培しており、苗を植えて育て収穫して食べるまでの喜びを知ることができる農業体験や、夏には小果樹の摘み取りなどを体験できます。昔、札幌市内の小学校教員をやっていらした菊池さんは、一九七〇年代から八〇年代にかけて児童・生徒の不登校問題が増加したことをきっかけに、子どもたちが通いやすいような新しい学校を自分たちでつくろうと活動を開始しました。最初、なにもなかったこの丘に、水道と電気を引っ張るところからスタートし、一〇年くらいは畑や施設づくりに追われる日々だったそうです。今年で創設二十三年になります。現在では、札幌校、岩見沢校、釧路校、札幌学院大などの大学からも学生が参加しており、授業の一環として実習に来る小・中学校が増えてきているそうです。

02 平野先生と教育福祉村

平野先生が余市教育福祉村で親子キャンプを実施するようになった経緯には、大きく二つのきっかけが影響しています。

一〇年ほど前、当時、子育てをしながら余市から通っていた大学院生に「私が手伝っている素敵なところがある」と声を掛けられたのが最初のきっかけです。元フリースクールやフリースペースの運営に携わっていた平野先生は話を受け、そのＮＰＯの幹事を担うこととなりました。

また、ことばの教室に所属する教員らが主催の中心となり、通級学級に通っていた子たちとキャンプを行っていました。しかし、教員と児童という関係の中で行うキャンプには、けがをさせたときの責任問題、運営の困難さなどの課題がありました。そこで、「ことばを育てる親の会　北海道協議会」の話を受け、教育大学の学生と共に教育福祉村の広大な土地でのびのびと遊びを発展させることができるような親子キャンプをスタートさせることになりました。

親子キャンプという名前の通り、キャンプを行うときは親子共に参加してもらいます。平野先生は「普段は、子どもが何をしでかすか目を離すことができず、つい何でも禁止してしまうことがあります。子どもたちを学生に預け、親たちには自由になれる時間を提供し、親同士が情報共有できる場にもしてほしかった」と狙いを話します。

03 親子キャンプにかける思い

「子どもたちにどんな障がいがあり、どんな特性を持ち、どのような困難を抱えているかは特に事前に学生たちに伝えることはしない」と話す平野先生。あえて事前情報を与えなくても教育大学の学生は臨機応変に対応できるといいます。

子どもたちと遊ぶ学生

しかし、学生は一つだけ注意しなければならないことがあります。それは「遊びを邪魔しない」ということです。平野先生は「二泊三日の親子キャンプの間はどんな遊び方をしてもいいことにしています。坂に川をつくってもいいし、ダムをつくっても誰も怒りません。年に四回だけ遊びたいことを遊びたいだけ遊ぶことができる環境をつくってあげることで、子どもたちは親子キャンプを心から楽しみにしています」と語ります。そういった空間をつくることで、いつもは全く謝ることをしない子が素直に謝れたり、キャンプを楽しみにしている子が普段の勉強も頑張ることができたりするそうです。

最後に平野先生は「こんなことを学んでほしい、こんな成長を望んでいるなどは考えておらず、何も期待していない。どんなことが起きるか分からないから楽しいのです。学生にも何も期待しないことで、『大学生だって失敗するんだから大丈夫！』という姿もあえて見せていきたいです」と嬉々と話しました。

手づくり水路にさらに工夫を凝らす

珍しい楽器に興味津々

インタビュアーの声

実際に親子キャンプにも参加し、子どもたちの自由な遊びを体験してみたのですが、とてものびのびした空間で、子どもたちが生み出す「遊び」に目からうろこでした。このような場所や機会を教育と結びつけて、もっと発信していきたいと思いました。

関口 実子（せきぐち みこ）　札幌校・教員養成課程・学校教育専攻・教育心理学分野３年

インタビュアーの声

年齢が上がるにつれ、自然の中で遊ぶ機会はほとんどなくなるので、このようなキャンプはたくさんの子どもたちや仲間、自然と触れ合うことで心も体も健やかに育つステキな場所だと思いました。久々に草の上を駆け回って楽しかったです（笑）。

山縣 まる子（やまがた まるこ）　札幌校・教員養成課程・芸術体育教育専攻・図画工作・美術教育分野１年

大雪山麓の大学施設「六稜山荘」で展開される魅力的な教育コンテンツ

旭川キャンパス

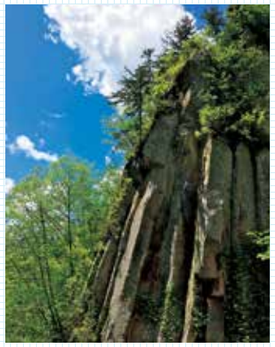
旭川校から約五十㎞、旭岳の山麓に、大雪山自然教育研究施設「六稜山荘」があります。旭川校の理科教育専攻の学生は、野外実習やゼミ合宿などの活動拠点として利用しています。大雪山国立公園の雄大な自然環境の中で展開されている〝面白い〟教育活動をご紹介します。野外実習を担当される和田先生、野外実習植物学分野の履修学生と、植物ゼミの合宿に参加した学生にお話を伺いました。

01 野外実習火山分野

―和田先生、よろしくお願いします。まず実習の内容について教えてください。

六稜山荘に到着するまでの道中で、柱状節理や山麓の溶岩・火砕流などの火山噴出物を間近で観察します。到着後は、学生が事前に大雪山の地形や気候について調べてきたことを発表する時間を設けています。登山をしながら山の地形を見たり、火山噴出物の観察やスケッチを通して噴火の規模や火山の成り立ちを考察することが実習のメインです。

―実習を通じて、どんな成果があったか教えてください。


ピウケナイ川の柱状節理

学習指導要領には、理科の指導の目的として「自然に親しむ」「自然を愛する心情を育てる」「野外観察を重視する」ことが明記されていますから、教員側が自然を理解している必要があります。しかし、現職教員は、地学分野を教えるに当たって苦手意識があるようです。この研究施設を利用して身近な自然教材を活かした実習を行うという経験が、学生たちに、郷土の自然の成り立ちなどを熟考し認識を深めていく、良い契機を与えていると考えています。

―大雪山自然教育研究施設の魅力を教えてください。

この大学に来た一九八四年からずっと利用していますが、一番の魅力はゆったりと間近で自然を楽しめることです。この施設にいると、まるで自然に溶け込んでいるような気持ちになります。夏場は登山などの自然体験学習や実習、卒業研究、冬場はスキーの活動拠点にもってこいの施設環境だと思います。学生だけでなく一般の方も利用できるので、自然を慈しむ活動が、ここを拠点に広がってほしいですね。

―ありがとうございました。

02 野外実習植物学分野

―履修した学生に伺います。この実習にはどんな狙いがあるのでしょう。

低地と高山帯に生育している植物相を知ることで冷温帯の植生を擁する北海道の自然環境を理解することです。北海道の自然環境の希有な特徴について、体験的に学びます。旭岳では、日本有数の高山植物相を学ぶことができます。理科教員を志す上で、フィールドワークや植物の知識は必要不可欠なものです。そのため、この実習はとても重要だと思っています。

―植物学分野の実習の詳細を教えてください。

春先の旭川市内の低山から始まり、八月上旬の旭岳周辺の植生観察と登頂で終わりを迎えます。低山地での活動では、フィールドワークや植物観察の基本から学び、旭岳との比較の準備をします。旭岳での実習は二泊三日です。一日目と三日目は、旭岳山麓の中間的な標高のフィールドで、植物の標本採集を行います。二日目には大雪山の高山植物を観察します。高山植物は、生育地のみならず開花期間や個体数も非常に限られています。その観察を通して、植物の多様性、植物相、植物群集の構造へと関心を深めます。

―実習を通して学んだことや発見したことを教えてください。

低山でのフィールドワークでは、普段の生活では体験できない、北海道に自生している植物を多く知ることができました。旭岳での実習では、高山植物の特徴について多く学びました。低地では見られない、矮小化した樹木や、一面に広がる花畑などを見ることは貴重な経験です。他にも、標本の作り方や野外観察の基礎知識など、教員に必須の知識を得ることができます。この経験を基に、今後の大学生活でも周りの環境に関心を持って過ごしていきたいです。

―ありがとうございました。

天空のお花畑。高山植物の女王チングルマ

03 植物ゼミ合宿

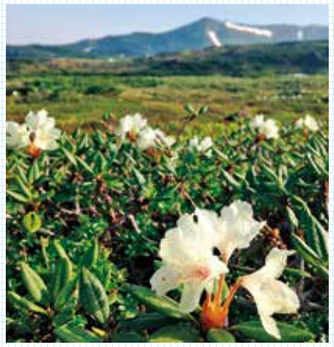
―植物ゼミの皆さん、よろしくお願いします。上級生である二、三年生に伺います。六月と七月の二度にわたって行われたゼミ合宿の目的を教えてください。

三年生　北海道最高峰の旭岳に見られる、色鮮やかな高山植生を観察し理解することです。五合目の姿見駅まで一気に駆け上がり、ロープウェイから見る森林限界の景観は格別です。

二年生　日本百名山にも選ばれ、一等三角点を有する旭岳に登頂することを楽しみに、参加しました。

―合宿ではどのような体験ができるのでしょうか？

三年生　標高一二〇〇ｍ地点で森林限界を越えると景色が一変して、背の高い木が見られなくなり、地面をはうように生育するハイマツ帯が出現します。標高約一五〇〇ｍの姿見駅から散策路に出ると、チングルマ、キバナシャクナゲなどカムイミンタラ（神々の遊ぶ庭）の名にふさわしい、鮮やかな高山植物群を観察することができます。


キバナシャクナゲ

―六稜山荘の良さを教えてください。

二年生　学びに素晴らしい場所だと思います。旭岳という絶好の研究対象のそばに、同じ目的を持った仲間が集い、寝食を共にして学ぶことはなかなかできない体験だと思います。

三年生　天然温泉も素晴らしいですよ。

―合宿を通して得たこと、感じたことを教えてください。

三年生　「北海道の雄大な自然」を体験できました。北海道は高緯度に位置するため、比較的身近なところにも希少な植物が見られます。この素晴らしい環境で学術的に学ぶことを志す後輩が増えていってほしいです。

二年生　七月の旭岳に登頂し、達成感を得ることができました。六月はまだ雪がたくさんありましたが、七月には雪解けが進み、変化した景色を見ることができて、とても良い体験でした。

―初めて参加した一年生からも感想を伺いました。

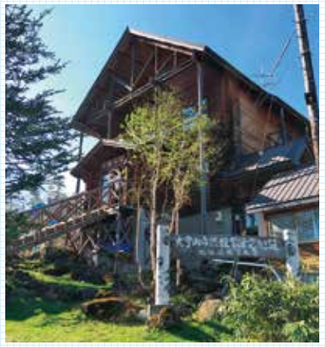
● ゼミ合宿に二回とも参加して、普段の講義では得られない貴重な経験ができました。

● 普段から植物を観察しますが、合宿中に見た高山植物はどれも初めて見るものばかりでとても新鮮でした。実際に自分の足で山に登って植物を観察することで、植物の特徴だけではなく、生育している周囲の環境なども知ることができました。

● 大学の施設を使って、素晴らしい経験ができることは当たり前のことではないと思います。この合宿を通して、恵まれた環境に感謝しつつ、自然を大切にしていきたいと思うようになりました。また機会があれば参加したいです。

―ありがとうございました！

メンバー集合
姿見駅より旭岳を望む


六稜山荘の外観

インタビュアーの声

私も6月の植物ゼミ合宿に参加して取材しました。研究施設内外の恵まれた環境の中での経験は、将来教壇に立つときの大きな糧になると感じました。また、私は今年、火山分野の野外実習を履修しています。実習ではゼミ合宿で得た知識も活かし、大雪山系について一層理解を深めたいです。

杉森 琉奈（すぎもり るな）　旭川校・教員養成課程・理科教育専攻２年

インタビュアーの声

私も２年時には野外実習を履修して、六稜山荘を利用しました。今回の合宿への帯同を通して、同じ場所で同じ時間を過ごしていても、得られることは人によって大きく異なると感じました。六稜山荘は、植物学や岩石学に限らず、さまざまな目的を持った学生に有益な施設であると思いました。この記事が、より多くの学生が北海道の自然について積極的に学ぶきっかけになればと思います。

川村 風花（かわむら ふうか）　旭川校・教員養成課程・理科教育専攻３年

E-Lunch・天文部・酪農体験

釧路キャンパス

釧路校の面白い活動として、今回は、E-Lunch・天文部・酪農体験の三つを取り上げます。それらの魅力に迫るため、E-Lunchは、学生スタッフの渡辺さんが実際に参加して取材をし、天文部と酪農体験については、学生スタッフの西村さんが部員と受講生にインタビューをしました。

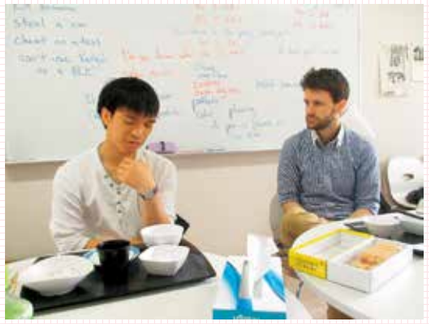
01 E-Lunch

釧路校には国際交流を目的とした、国際交流サークルKIXがあります。JICAの方を迎えた際には「インターナショナルナイト」の企画・運営や、根室管内のALTを招いて英語教育について交流をする「E-Night」、海外体験をした学生の報告会や交流会を行う「2X」を定期的に行っています。

その中で今回は、毎週火曜日・木曜日のランチタイム（十二時二十分～十二時五十分）に開かれている「E-Lunch」について紹介します。「E-Lunch」では、英語分野のカネフラー・クリストファー・アラン先生（以下クリス先生）と一緒に英語で会話をしながらお昼ご飯を食べます。（写真①）話す内容は、最近あったニュースや週末の予定、サイコロ（写真②）を使ったトークなど、英語が苦手な人でも難しくない内容になっています。「これ英語でどうやって言うんだろう…？」というときは、クリス先生や参加している学生から教えてもらうこともできるため、英語が苦手な人でもしゃべりやすい雰囲気です！

私もこの「E-Lunch」に参加しましたが、和気あいあいとした雰囲気でとても楽しかったです！　その日はクリス先生が用意した英会話カードゲームを使い、カードに書いてあるお題に沿って英語で答えますが、英語があまりしゃべれない私でもクリス先生がヒントをくださるおかげで「あれ？　意外と私って英語しゃべれる？」と思うほど、英語をもっと身近に感じることができました！

英語に対して苦手意識を持つ人はたくさんいるかと思います。しかし、大切なことは〝伝えよう〟とすること！　この「E-Lunch」では〝伝えよう〟とする気持ちが高まり、授業以外での英語の習得にも役立つのではないでしょうか。ぜひお昼には国際交流室に遊びに行ってください！



①クリス先生と食事をしながら話しています。

②話題が書かれたサイコロ

02 天文部

釧路校には、屋上に大きな天文台があります。そこでは天文部をはじめ、天文に興味のある学生たちが集まり、天体観測をしています。今回は天文部三年伊藤あすかさんにインタビューをしました。

―天文部の良いところは何ですか？

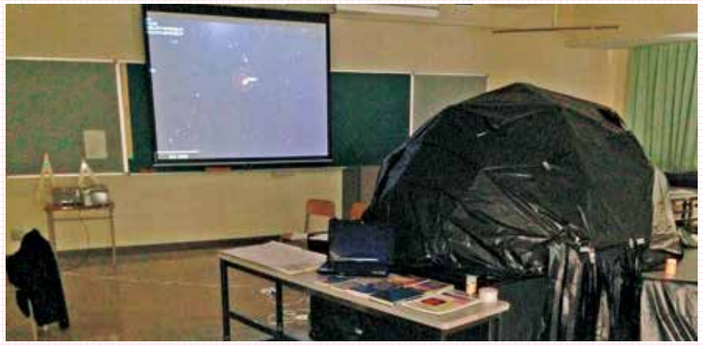
星座や神話に詳しくなるところです。学祭では子どもたちにミニプラネタリウムを上映しています。私は秋の星座が好きで、その中の「アンドロメダ座」の神話が好きです。簡単に言うと、アンドロメダというお姫様がクジラのお化けのいけにえになるのを、ペルセウスという青年が助けるお話です。他にもたくさんの面白い神話があるのでぜひ調べてみてください。

―天文部の面白い活動は何ですか？

たまに、遠出をして学校以外で観測することがあり、冬に岬まで行き観測をしました。岬なので風が強く、本当に寒かったけど、それを感じさせないくらいきれいな星空で流れ星がたくさん見られました！

―観測で印象に残ったものは何ですか？

七月三十一日の火星大接近です！



釧路学祭のプラネタリウムの様子

―他キャンパスに負けない、ここがすごいところを教えてください。

B棟の屋上にある、赤道儀。とても立派で釧路校の自慢です！！

03 酪農体験

釧路校ではカリキュラムに選択科目ではありますが、教育フィールド研究Ⅶ（道東地域体験）という科目で酪農体験をすることができます。酪農体験の魅力について臨床教育学研究室三年の岩岡あずささんにインタビューをしました。

―なぜ酪農体験に参加されたのですか？

私は札幌出身であまり酪農というものに触れたことがなく、興味を持ったからです。先輩からも面白いという話を聞いたので参加を決めました。

―ずばり、酪農体験の魅力とは何ですか？

牛の搾乳をすると、おいしい牛乳が飲めます。牛乳を好きになりたいという目的で参加した人もいるそうですよ。酪農家さんがとても温かく、運が良ければ牛の出産にも立ち会えます。このような貴重な体験をできることが魅力だと思います！

―酪農体験を通してためになったことを教えてください。

教科書で習ってはいたが、実際に行ってみると思っていたのと全然違っていたので行ってみて良かったと思っています。この経験は教師になったときにも役立つと思います。

―酪農体験をしてみたい、少し興味があると思っている後輩に一言お願いします！

「いただきます」「ごちそうさま」の意味がわかるようになります。酪農体験の二日間はとても充実するはずです。少しでも興味があるなら行動あるのみ!!　たくさんのことを学べると思います。ぜひ参加してみてください。

釧路酪農体験に参加している岩岡さん

レポーターの声

自分たちが通っている大学の面白さは、通っているからこそ気づかないもの・ことが多いと取材を通して感じました。きっと、もっとたくさんの面白いところがあるはず！　さらに見つけていきたいと思いました。

渡辺 有紀（わたなべ ゆき）　釧路校・教員養成課程・学校カリキュラム開発専攻3年

インタビュアーの声

釧路校での面白い活動について取材しました。天文部は、意外と忍耐力が必要であることがわかりました。私も、天文分野について勉強してみたいと思いました！　観測にも参加したいです！　そのほかにも、さまざまな分野での面白い活動があります！　ぜひ、釧路校へ。

西村 日花里（にしむら ひかり）　釧路校・教員養成課程・学校カリキュラム開発専攻3年

子どもと学生が触れ合う「小集団臨床」ってどんな授業？

函館キャンパス

特別支援学校教諭免許の取得を希望する学生が受講している授業「障害児小集団臨床Ⅰ、Ⅱ」（以下、「小集団」）を取材しました。この授業では、前期、後期の木曜日に一時間程度、キャンパス内にある特別教室で、特別な支援を必要とする小学生の子どもたちとさまざまな活動を行っています。さて、どのような活動が行われているのでしょうか？

01 実際に「小集団」を見学しました！

木曜日の十六時半頃、「小集団」に参加する子どもたちが特別教室にやって来ます。子どもたちは教室に入るとまず、自分の名前が書いてある椅子に座ります。毎回の活動は「はじめの会」「みんなの時間」「運動の時間」「おやつの時間」「おわりの会」という流れです。

「はじめの会」ではあいさつ、目標の確認、今日の係の発表などを行います。目標とは、活動全体を通してのもので、今回の目標は「聞きマスターになろう」でした。ホワイトボードを使い、目標は常に確認できるようにします（写真①）。目標の他に、各時間での約束も決めています。あいさつはその日の係の子どもが行います。

「みんなの時間」では、見る・聞くということをテーマにゲームを行います。今回は、「ちがい探しゲーム」でした。内容は学生の写真（笑っている顔など）を見せたあと、別の学生の写真（泣いている顔など）を見せ、どのような違いがあるかを見つけるというものでした。このゲームを始めるに当たって子どもたちが静かに人の話を聞けるよう、「0（ゼロ）の声で聞く」という旗が揚がったら活動は中止するというルールを立てていました。こうすることで、子どもたちはゲームを続けるために静かに話を聞くということができます。ゲーム中、発表者は手を挙げマイクを受け取ったらみんなの方に体を向け、答えを発表し、聞く人は姿勢を正して静かに聞くよう学生が促していました。

「運動の時間」では、ルールを守ることをテーマに行います。今回は、「ペットボトルボウリング」を行いました（写真②）。約束は「投げる順番を話し合って決める」です。まず始めに学生がデモンストレーションでルールを確認します。試合は二回行われました。子どもたちからは味方を応援する様子や、悔しい気持ちをぶつける様子が見られました。試合は終始盛り上がりました。

①今回の目標は「聞きマスターになろう」

②ペットボトルボウリング　盛り上がりました！

「おやつの時間」は、ただみんなでおやつをいただくのではなく、役割分担をテーマにしています。今日の約束は「自分のやりたい仕事を発表しよう」でした。ここでいう仕事とは、テーブルを拭く、おやつを取ってくる、ジュースをつぎ分けるなどです。それぞれの仕事をした後、子どもたちは二つのグループに分かれていただきます。おやつを食べているときの子どもたちはおしゃべりをしていて楽しそうでした。

最後は「おわりの会」です。今日の活動を担当の学生と、静かに話を聞けたか、ルールを守れたかなどの個人個人違った項目で振り返ります。そして、次の活動の日程を確認して終わります。

どの活動にも約束があり、それは、子どもたちがルールを守ることより良い活動になることを実感するためでした。

「子どもが楽しくないと意味がありません」と語る　五十嵐靖夫先生

02 「小集団」担当の教授 五十嵐靖夫（いがらしやすお）先生のお話

「小集団」は、学校で友達関係に苦労している子、ソーシャルスキルが不足している子どもが約八人参加しています。受講者は約二十人ですが、制限は設けていません。学生は、毎週金曜のお昼休みにカンファレンスを行い、活動内容を決め、教材づくりと簡単な指導案を作成し、当日のお昼休みには最終打ち合わせを行っています。活動自体は一時間程度ですが、活動を成功させるためにたくさんの時間をかけています。子どもたちが来てくれること、子どもたちと関われることは何より面白いです。学生の考えた活動がうまくいかなくても面白いです。

この授業で大変なのは実は僕よりも学生。僕は学生に、指導がうまくいかなかったとき、他の人や子どものせいにするのではなく、自分のやり方がダメだったのだと気づく人になってほしいと思っています。子どもや親の育て方が悪いとする教師が多いと感じることがあります。「小集団」での活動を通して学生たちには、「教え方」を考える人になってほしいと願っています。また、学生が行っている活動なので専門的ではないのにも関わらず、参加してくれている子どもたちに感謝しています。質の高い活動を目指すとともに子どもたちに「楽しい」と思ってもらいたいです。

どんなに栄養があってもおいしくないと食べません。これは教育も同じです。どんなに理論的でも子どもが楽しくないと意味がありません。昨年の後期の小集団では最終日に節分パーティーを行いました。さまざまなブースを設けて、冬なのに子どもたちは汗だくで楽しんでいました。さすが教育大学の学生だなあって。学生のアイデアはすごい！　面白い！　と思いました。

03 「小集団」の面白さ！

教育を学ぶ環境であっても、実際に子どもたちと触れ合うことができる授業は多くありません。「小集団」では実際に子どもたちと触れ合うだけでなく、その時々の状況に合わせて臨機応変に対応できる実践力が求められます。さまざまな事情を持つ子どもたちと活動することは、時に大変なこともありますが、子どもたちの成長を身近に感じることができる貴重な経験です。これから教員を目指す学生にとって「小集団」はとてもためになる、そして子どもたちのいろいろな表情に出会える、面白い授業なのです。

レポーターの声

私は昨年、小集団臨床を受講していたので、久しぶりに楽しそうな活動を見ることができて良かったです。学生が時間をかけて考えた活動を子どもたちが楽しんでやってくれることが、学生の達成感にもつながると思いました。とても素敵な活動だと思うので、皆さんこれからも頑張ってください！

山邉 瑞穂（やまべ みずほ）　函館校・国際地域学科・地域教育専攻３年

岩見沢キャンパス

岩見沢キャンパスの魅力を最大限に発信！情報拠点i-BOXの幅広い取り組みとは？

01 i-BOXってどんな場所？

JR岩見沢駅舎内（有明交流プラザ二階）には岩見沢キャンパスの活動情報拠点である「i-BOX（アイボックス）」があります。岩見沢キャンパスの活動を多くの人に伝えるため、本学と岩見沢市が協同して、二〇一三年五月に開設されました。i-BOXのスペース内では、学生の作品や大学での活動を紹介する展覧会活動が行われています。

i-BOX 外観

また、学生や学校のイベント・活動情報のSNSなどを利用した発信活動も行われています。展覧会や演奏会のパンフレットなどの配布もあり、幅広い年代の地域の方に岩見沢キャンパスの情報を発信しています。i-BOXにはキャンパスガイドや過去の修了・卒業制作展のカタログが置いてあったり、学生の活躍が取り上げられた新聞記事が紹介されていたりと岩見沢キャンパスの魅力を最大限に知ることができる場所になっています。

02 i-BOXスペース内での展示活動

i-BOXでは、美術文化専攻の学生が主体的に作品を発表する「学生企画展示」や、授業の成果発表、教員によるコレクション展など、年間に二十近くの展覧会が開催されています。

美術文化専攻の中でも絵画、工芸、映像など幅広いジャンルで制作を行う学生たちの力作が、スペースいっぱいに展示してある様子は圧巻です。学生も日々一生懸命につくり上げた作品を地域の方に見てもらえる場所としてi-BOXを大切に利用しています。

絵画作品展　搬入の様子

二〇一八年五月二十三日から六月七日には美術文化専攻油彩画研究室四年生の小松美月さんの個展「おもいだしたい色」が開催され、小松さんの記憶がたくさん詰まった優しい雰囲気の油彩画十一点が展示され、多くの来場者の心を温かくさせました。

また、岩見沢キャンパスで行われている授業について紹介する展示も開催されており、二〇一七年には芸術・スポーツビジネス専攻三年生の必修授業「ビジネストレンド」の成果発表展が行われました。世界最先端のビジネスを肌で感じるために二〇一六年に韓国に研修授業へ行った学生たちが、現地で感じた日本と韓国の違いやお薦めの施設を紹介。また韓国の民族衣装チマチョゴリの試着会も実施され、多くの来場者の皆さんに楽しみながらビジネス専攻の取り組みを知ってもらうことができました。

ビジネストレンド展

03 演奏会や展覧会などの情報をいち早く発信

スペース内での展示の他にも、多くの媒体で岩見沢キャンパスの情報を発信しているi-BOX。ブログなどでイベント情報や大学の取り組みを発信しているほか、SNSで大学・学生主体の展覧会・演奏会についても最新の情報をお届けしています。

音楽文化専攻の定期演奏会や授業演奏発表会の日時や見どころも紹介されており、二〇一七年にはi-BOX内で音楽文化専攻の企画を紹介する「ミュージックキャラバンプロジェクト展」が行われました。ミュージックキャラバンプロジェクトとは二〇一四年から始まった音楽文化専攻の学生が音楽団を結成し北海道内各地を訪れ、演奏活動・楽器体験会を行う取り組みです。i-BOXではこの企画を写真で振り返るだけではなく、楽器や楽譜も展示され、関連企画としてミニコンサートも開催されました。

04 さまざまな活動を学生スタッフが突撃取材！

学生や教員の活躍もいち早くお届けしているi-BOX。部活動での試合結果や活躍する学生へのインタビューもSNSに掲載しています。

実はi-BOXには学生スタッフも勤務しており、取材に行ったり記事を作成したりしています。美術文化専攻三年生の及川浩奈さんは、北海道教育大学駅伝部員の皆さんを取材。意気込みや目標を、学生ならではの観点で引き出し、記事にまとめていました。取材の取り付けや写真撮影、編集も学生自らが行っています。多くの人と関わりながら岩見沢キャンパスの取り組みを広く取材できるのは、とても楽しくやりがいがあるようです。

四つの専攻がある岩見沢校の魅力を一二〇％感じられるi-BOX。

岩見沢を訪れた際にはぜひ立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

ミュージックキャラバンプロジェクト展

駅伝部を取材する学生スタッフ

編集作業を行う学生スタッフ

レポーターの声

いつも豊富な情報を届けてくれるi-BOXですが、こんなにさまざまな取り組みをしていることに驚きました。学生の頑張っている様子を取り上げ、さまざまな人に届けてくれるi-BOXは岩見沢校にはなくてはならない存在だと改めて強く感じました。

秋本 結以（あきもと ゆい）
岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・美術文化専攻・美術・デザインコース・油彩画研究室3年

i-BOX情報

■開館時間	10：00〜17：00
■ホームページ	http://www2.hokkyodai.ac.jp/iwa/user/?uid=i-box
■Facebook	https://www.facebook.com/hue.ibox
■Twitter	@iBOXhue

新入生の抱負 2018

From freshman

今年の4月に入学した新入生は、どんな思いを胸に未来を見据えているのでしょうか？　希望と熱意にあふれる皆さんに、その抱負を一言で表現してもらいました！

岩見沢キャンパス

岩見沢校・美術文化専攻・
美術デザインコース１年
越浪 実柚（こしなみ みゆう）さん

抱負は「表現する」です。美術文化専攻での作品制作を通して、これからどんな風に表現できるのか、どれだけ幅を広げることができるのか、これからの自分の未来に期待しています。まずはこの1年生の期間を全力で頑張ります！

これが私の作品です！

憧れていた日本の地で、電車に乗っておでかけしました！（富良野）

札幌キャンパス

札幌校・教員養成課程・学校教育専攻・教育心理学分野１年
Ptitcyna Rufina（プティシナ ルフィーナ）さん

私は小さい頃から日本に興味があって、留学したいと思っていました。それで、中学生になった時に絶対日本に行くと決めました。学校を卒業し、1年間ロシアの大学で勉強してから日本に来ました。いろいろありましたが、教育大学に入りました。夢を叶えた今、新しい夢を見つけ、それに向けて充実した大学生活にしていきたいです。

函館キャンパス

函館校・国際地域学科・
地域協働専攻・地域環境科学グループ１年
林 美乃里（はやし みのり）さん

食べることが大好きなので、函館の食を楽しみたい！

大学生活は自分のやりたい事をする時間がたくさんあると思います。アルバイト・サークル活動・ボランティアなどいろいろありますが、私の一番の楽しみは函館散策です。おいしいものをいっぱい食べて、楽しそうなことをたくさんやりたいです。函館という環境を楽しみながら、大学生活を有意義なものにしていきたいです。

ここ一番の集中力で
タンポポを観察しています

旭川キャンパス

旭川校・教員養成課程・理科教育専攻１年
相馬 葉名（そうま はな）さん

私は、中学校の理科教師になりたいと思い旭川校を選びました。教師になることは高校生のころからの夢でした。でもこれは、子どもが「大きくなったら先生になりたい」と答えるのと同じ、漠然としたものでした。入学して講義を受ける中で、教師になることが明確な自分の目標へと変わってきました。教師として生徒に理科の楽しさを伝えられるように、今ここでしかできない重要な経験として、教授陣の専門性に触れ、多くのことを学びとっていきたいです。

夏休みもしっかり
勉強しています！

釧路キャンパス

釧路校・教員養成課程・
地域学校教育専攻１年
柴田 好（しばた このみ）さん

釧路に来て、たくさんの友達や優しい先輩方に恵まれて楽しい大学生活を送っています。大学生活の中で勉強や部活動などいろいろなことに全力で取り組んでいきたいです。そして毎日少しずつでもいろいろなことを吸収して成長していきたいです。自分が日々成長して、将来子どもたちの成長をしっかりと支えられるような先生になれるように頑張ります。

函館キャンパス便り

地域プロジェクトの充実・発展と学習環境の支援を目的とした「アクティブラーニング室」。そこでは毎日たくさんの学生が、学習・研究に励んでいます。他の部屋よりも人が集う理由について、設置されているモノ、利用者の声を調査してきました。

函館校に新設された「アクティブラーニング室」の人気の秘密

①教材づくりをしているところ

アクティブラーニング室とは?

アクティブラーニング室は、それまでの「学習室」を改修し、新設されました。室内には移動可能な机と椅子が設置され、五十人程度、収容可能になっています。この部屋にある机と椅子は、アクティブラーニングを行う学生が、より積極的に、より深い学びを行うことを目的に、Ｃａｍｐｕｓノートをはじめとする文具・オフィス家具を販売しているＫＯＫＵＹＯがプロデュースしたものとなっています(ちなみにお値段は、少しお高めとなっています……)。特に椅子は普通のものとは違い、もたれ掛かると後ろに傾き、乗り出したいときには前に傾くなど、姿勢に合わせて調整できるようになっています。もちろんリラックスする姿勢にも調節可能です。そしてプロジェクターや、移動式ホワイトボード、タコ足配線、冷暖房、Wi-Fiなどの設備が充実しています。さまざまな学生が利用しており、模擬授業の練習、ミーティング、自主学習、教材づくりなど、使われ方も多岐にわたっています。

ちなみに「アクティブラーニング」とは、教師からの一方的な講義で知識を得るのではなく、学生たちが主体的に参加、仲間と深く考えながら課題を解決する力を養うことです。その名前の通り、アクティブラーニング室は、学生たちが自由に話し合いやすいスペースとなっています。

アクティブラーニング室をよく利用している学生にインタビュー!

❶授業の教材づくりで利用している学生(写真①)

Q アクティブラーニング室を利用する理由は何ですか?

A 机が大きく、スペースがたくさんあるので、作業がしやすいからです。飲食自由な点も、気軽に使いやすい理由かなと思います。また、夏の時期は、冷房が効いているので、快適に過ごせるのもうれしいです。

❷模擬授業の練習をしている学生(写真④)

Q アクティブラーニング室の良いところはどういうところですか?

A みんなで集まって話し合いをしやすいからです。他の学生もミーティングなどで話をしているのと、広いこともあって、声の大きさをあまり気にしなくて済むのも良い点だと思います。また、白が基調となっていて、窓も多く明るいので使いやすいです。他の学生にも話を聞いたところ、たくさんの意見を頂きました。

- 自由度が高いので、気軽に使いやすい
- Wi-Fiを使うことができる
- 机を自由にレイアウトできるので、多少人数が多くなっても利用できる
- 学校のさまざまな入り口から近いため、集まりやすい
- 円になって話し合いができるなど、アクティブラーニング室を利用したいと思う理由はさまざまあるようです。

③真剣にミーティング

②ミーティングのための資料を製作中

アクティブラーニングにちょうどいいアクティブラーニング室

取材をした時期はちょうど、函館校の目玉授業でもある地域プロジェクトの成果発表会の準備期間だったため、いつもより人が多く、さまざまなミーティングが盛んに行われていました。ここまで学生が同時にいろいろな使い方をしている教室はなかなか見ないので、自由度の高さがうかがえました。皆さんもぜひ、快適で学習に取り組みやすいアクティブラーニング室を利用してみてはいかがでしょうか。

レポーターの声

珍しい形の机・椅子については、前から気になっていたので、アクティブラーニング用につくられているものだとこの機会に知ることができて良かったです。私もよく利用しているのですが、人が多くて座れないことがあり、それ程人気の教室なのだと思います。これからも利用していきたいです。

水口 史菜(みずぐち ふみな)　函館校・国際地域学科・地域教育専攻3年

⑤おのおの学習に励んでいる風景

④模擬授業の練習(友達に意見をもらいます)

大学院生の研究紹介

「複式学級」における算数科教育のミライのカタチを考える

札幌校・教員養成課程・
基礎学習開発専攻・算数グループ卒業
北海道教育大学大学院教育学研究科・
教科教育専攻・数学教育専修2年

話＝**武田 望**(たけだ のぞみ)さん

「複式学級における算数科学習指導」に関する研究を行っている、大学院生の武田望さん。研究の一環で行っている、授業を通した子どもたちの学習についての調査や、研究の展望、ご自身の進路についてお聞きしてきました。

―大学院へ進学しようと思ったきっかけは何だったのでしょうか?

もともと札幌校の基礎学習開発専攻(旧課程)の学部生でした。

出身が釧路というのもあり、教員採用試験は「北海道」で受けようと思っていたので、講演や研究会など、いろいろな情報を得られる機会が多い札幌で、もう二年、勉強しようと思いました。もう一つの理由は、猿払村で子どもたちと触れ合うイベントを学生と教育委員会とで開催しているのですが、先輩たちが運営していたのを引き継ぎ、他の学生に実地的な経験の機会を提供し、地方が情報を発信していける場をつくっていきたいなという思いがあったからです。

―研究内容の概要を教えてください。

私が研究しているのは、一つのクラスに異学年同士の子どもがいる「複式学級」における「算数科の指導」です。先行研究はさまざまなものがあるのですが、それぞれの学年で別々に教えるものばかりでした。せっかく同じ学級内にいるのだから、学年を超えた子ども同士の学び合いが算数科教育でも可能なのではないだろうかと思い、研究を始めました。学び合いの「良さ」について調査し、授業案をつくり、一つの指導の選択肢として提案できればなと思っています。

―学外で調査を行っていると聞きました。どのような調査か教えてください。

実際に複式学級の現場に行って調査を行っています。一つ前の質問で答えた「複式学級の良さ」を見つけるために授業を行い、その様子を撮影したり録音したりして授業を分析していこうというものです。石狩管内や先ほどの猿払村の近くなど、受け入れてくださるところはどこでも行こうと、広く活動しています。

―同学年の子どもたちで編制される「単式学級」が一般的だと思うのですが、「複式学級」に着目した理由は何ですか?

私の地元は釧路の小さな町なのですが、自分が将来、地方を含めいろいろな地域に飛び出していくことを考えると、今の自分は何ができるかなと思いまして……。そこで一つの視点として「複式学級」に焦点を当ててみることにしました。また、偶然にも指導教員の佐々祐之(ゆき)先生が先行研究の一つに携わっていたこともあり、研究も進めやすいだろうと考えました。

―小学校での「算数科教育」と中学校・高校での「数学科教育」とのつながりについてはどうお考えですか?

私は小・中・高それぞれの教員免許を持っているので、「小学校・中学校・高校で教えたい」という野望があります(笑)。「算数」と「数学」にはいろいろと違う点がありますし、小・中・高にもそれぞれの特性があるのですが、それらを自ら体感して学んでいきたいと思っています。本を読めば、その違いなどは知識として頭には入ってくるのですが、自分の経験として身に付けられないので、私としては自分の身体で学んで「納得」していきたいです。このつながりについては、小・中・高を縦断し、それぞれについて身をもって学んだ将来の自分に研究してほしいと思います。

―今後、研究をどう活かしていこうとお考えですか?

将来、自分が働いているときに役立てたいというのが根底にあります。そのことを意識して研究していますね。生きているうちに「理論」と「実践」が重なってくればいいなと思います。

―最後にご自身の進路についてお聞かせください。

小学校の教員になろうと考えています。一時期は「教育」とは関係ない職種に就き、さまざまな経験を積んでから教員になることも考えていたのですが、教育実習で「現場に入りたい」という思いが強くなりました。一年間しっかり現場の学級の子どもと関わりながら、自分も成長できればと思います。

―今後の研究も応援しています。ありがとうございました!

インタビュアーの声

とても話しやすい方で、楽しくインタビューすることができました。明るく話す中にも、研究や教育への熱い信念が垣間見えました。「常にワクワクしていたい」と語ってくれた様子が、とても印象的です。

稲葉 拓紀(いなば ひろき)
札幌校・教員養成課程・
言語・社会教育専攻・国語教育分野3年

研究ファイル

哲学者の視点で考える、教員に求められるもの

哲学者九鬼周造（くきしゅうぞう）の偶然性と必然性の思想を手掛かりに人間形成や道徳の問題を研究されながら、旭川校で教鞭を執っておられる古川先生。哲学者であり教育者である古川先生が「教育の在り方」について語ってくださいました。

旭川校・教員養成課程・教育発達専攻
古川 雄嗣（ふるかわ ゆうじ）先生　旭川校准教授

PROFILE

1978年三重県生まれ。京都大学大学院教育学研究科修了。著書に『偶然と運命』（2015年）、『看護学生と考える教育学』（2016年）、編著に『反「大学改革」論』（2017年）がある。2018年8月に、本学での担当講義「道徳の指導法」をもとにした新著『大人の道徳―西洋近代思想を問い直す』を東洋経済新報社より刊行予定。

―教育学を研究しようと思ったきっかけを教えてください。

直接的なきっかけは、高校の教員になろうと思っていたことです。教員というものは「何を」「何のために」子どもたちに教えるべきものなのかを、歴史的・社会的に考えたいと思ったためです。最初は「研究」までするつもりはなかったのですが、勉強しているうちに、やめられなくなったという感じです。

―九鬼周造さんの考えの中で特に印象的なものを紹介してください。

「人間は自己の運命を愛して運命と一体になりなければならない。それが人生の第一歩でなければならない」という言葉でしょうか。彼の哲学は「偶然性」をテーマにしていますが、人生とはまさに偶然の積み重なりです。なかには不本意な偶然、つらく苦しい偶然もあるわけですが、それも含めて一つ一つの偶然を「運命」として引き受けていかなければならない。そんな思想です。

―"生きる"という講義を担当されていますが、ご自身にとって生きる意味とはどのようなものでしょうか？

フランクル（一九〇五～一九九七、心理学者）の言葉にあるように「日々の務めを果たす」ということに尽きるかなと思います。その務めというものが何か、具体的には分かりません。だからその都度その都度自分がやるべきことを果たしていけば、結果として、何らかの務めを果たしたということになるのだろうと思います。『新約聖書』の中に「明日のことを思い煩うな。一日の労苦は、その日だけで十分である」という言葉があるように、私は「自分の生きる意味は何だろう」と思い煩うことはありません。

―教育学の研究の魅力を教えてください。

実は教育学が面白いと思ったことは、あまりありません（笑）。なぜかというと、非常にイデオロギッシュな学問だと思うからです。イデオロギッシュというのは「ある特定の価値観をあらかじめ前提としてそれを疑うことを許さない」という意味です。どの学問も基本的にはそうなのですが、教育学は特にその傾向が強い。しかし、その前提を疑おうとすることこそが学問の本質であり存在理由だと思っています。私はやはり、前提にある価値観や思想が気になります。こういった問題を考えるのは、哲学や思想と呼ばれるものです。だから私は、専門は「教育哲学・教育思想」ということになっていますが、「教育学」の研究者というよりは、「哲学・思想」の研究者であるという自己認識を持っています。

―今後求められる教員の資質とはどのようなものであるとお考えですか？

前の質問に対する答えとも関係しますが、やはり疑うこと、自分の頭で考えることです。現職の教員も、その予備軍である旭川校の学生も総じて従順過ぎます。「素直」というより「従順」です。教員というものは、本来、学校教育の専門家です。しかし、例えば国の命令に対しても、それは違う、本当に大事なのはこういう教育だ、ということを批判的に考えて主張できる、そんな学問的力量のある教員がほとんど居なくなってしまいました。四十、五十年前の小・中学校の教員の書いた論文などを読むと、こんな高度なことをかつての学校教員は考えていたのかと驚かされます。今はどうですか。論文を書くどころか読む力さえない人がほとんどです。一概に今の教員や教育大生のせいにはできませんが、せめて意識の持ちようくらいは、もう少し変わってほしい。自分たちは教育の専門家になるために教育大学で学んでいるのだという意識を持ち、そのために一生懸命勉強してほしいと思います。正しい知識を持ち、大学でしっかりと勉強した人が、教員の世界を変えていってほしいです。

―最後に学生に向けて一言お願いします。

勉強してください。それに尽きます。「遊べるのは学生のうちだけ」という人がいますが、あれほどの大うそも少ないと思います。学生のうちにしかできないことは、勉強だけです。それ以外のことは大学を卒業してから、いくらでもできます。社会人になったら今よりももっと遊べます。恋愛も旅行も、学生時代よりももっとできます。だけど、勉強だけができなくなります。大人や先輩のうそにだまされないで、自分が今、本当にやるべきことは何かを考えて、大学生活を送ってほしいです。

インタビュアーの声

普段、他専攻の先生との交流が少ないため、古川先生のお話を伺えたことは、とても新鮮で充実した時間でした。今回のインタビューは自分のこれまでの大学生活を回顧し、これから何をすべきなのか深く考える貴重な契機です。古川先生、ありがとうございました。

杉森 琉奈（すぎもり るな）　旭川校・教員養成課程・理科教育専攻２年

釧路キャンパス → ベトナム

2018年3月3日～3月17日の間に行われた、国際交流基金のプログラム"日本語パートナーズ"ベトナム短期（3期）に、釧路校から6人の大学生が参加しました。そのうち、森博隆さんと千葉佳苗さんにお話を聞きました。

インタビュアーの声

私もこのプログラムに参加した6人のうちの1人です。教員を目指す私たちにとって、その国の教育現場に入って実際に授業をすることは、留学や旅行では経験することのできない、とても素晴らしい経験になりました。このようなプログラムに興味のある方は、ぜひ「日本語パートナーズ」で検索してみてください！

渡辺 有紀（わたなべ ゆき）
釧路校・教員養成課程・学校カリキュラム開発専攻3年

TO ベトナム **ホーチミン・バリア・ブンタウ**　期間 **2018年3月3日～2018年3月17日**

森 博隆（もり ひろたか）さん
釧路校・学校カリキュラム開発専攻・保健体育研究室3年

私は、3月3日から17日まで、国際交流基金"日本語パートナーズ"ベトナム短期（3期）として、釧路校の3年生6人でベトナムに行きました。訪れた街はホーチミン・バリア・ブンタウの3つで、訪問先は高校がメインでしたが、バリア師範短期大学とホーチミン人文社会科学大学の大学も訪問しました。1つの訪問につき、90分（45分×2コマ）の時間を使わせていただき、私たちの紹介&釧路の紹介、文化紹介&体験を行いました。

そして、私にとっての初海外がベトナム。日本での当たり前が全然違いました。「信号が赤なのにバイクが飛んでくる。日本製だけど見たことがない車。外食文化、道端で歩きながら歌うおじさん……」毎日新しい発見や出会いがありました。

バリアでは、現地のサッカーチーム"チームCay（カイ・辛いの意）"に混じり、サッカーをしました。もちろん、言葉は通じず、ボールを介してのコミュニケーション。1つのパス、プレー、そして1つのゴールで一緒に喜び、1つのミス、1つの失点で悔しがる。改めてスポーツの偉大さを感じながら、"チームCay"の一員になれたことの喜び、そしてこれからも応援したいサッカーチームを見つけました。

私たちは日本語を教える立場としてベトナムを訪問しましたが、学ぶことの方が多くあり、私にとって新しい挑戦の一歩になりました。

手押し相撲をしている様子

授業終わりの記念撮影

タンチョウ鶴の折り方を教えています

チームCayとサッカーをしました

TO ベトナム **ホーチミン・バリア・ブンタウ**　期間 **2018年3月3日～2018年3月17日**

千葉 佳苗（ちば かなえ）さん
釧路校・学校カリキュラム開発専攻・保健体育研究室3年

国際交流基金"日本語パートナーズ"というプログラムの日本語教育のボランティアで、2018年3月3日から同じ大学の6人で2週間ベトナムへ行ってきました。活動場所はバリア・ブンタウというベトナム南部です。気候は暑く、3月は乾期で気温は30度前後ありました。今回は高校生に日本語の授業をしました。また、現地の大学との交流も行いました。釧路のことについて紹介しながら、日本文化に触れたり、簡単な日本語を使ったりして授業をしました。大学では、学生に歓迎してもらい、ダンスや歌を披露してくださったり、大学の紹介をしてくださったりしました。また、一緒におしゃべりをして交流を深めました。

余暇では、現地の先生方と食事をしたり、現地の通訳ボランティアの学生さんたちとショッピングをしたりして過ごしました。ベトナム料理はとてもおいしかったです。また、文化の違いにも触れることができました。ベトナムの伝統衣装のアオザイを購入し、実際に学校現場に着ていくこともできました。

日本語教育は、日本語を教えますが、教師を目指す私にとって、"教える"ということがどういうことか分かったような気がします。

伝統衣装アオザイを着て授業をしました

現地の学生通訳ボランティアの皆さん

本場ベトナムのフォー

自己紹介をしている様子

休暇で見に行ったキリスト像

キャンパス長からのメッセージ

青春を懸けられる学科を目指して

2018年4月から岩見沢校のキャンパス長になられた志手先生にインタビューさせていただきました。岩見沢校のこれからについて、熱く丁寧に回答してくださいました!

岩見沢校キャンパス長
志手 典之 先生
（しで のりゆき）

PROFILE

岩見沢校・スポーツ文化専攻教授。1999年博士（歯学）取得。体力学を専門に、子ども達の体力の発育発達について研究を行っている。日本体育学会、日本発育発達学会に所属。

Q 志手先生のこれまでの変遷をお聞かせください。

A 中学時代からバレーボール部に所属していました。バレーボールという競技に熱中しながら、高校時代から体育教師を目指し始め、筑波大学に進学しました。大学でもバレーボールを続けていましたが、大学ともなると自分よりも上手いプレーヤーがたくさんいます。そんな中で、研究の面白さにも引かれていきました。当時まだ新しかったスポーツ生理学の研究を始めて、トレーニングの効果を測るためにネズミを走らせる日々でしたね。大学院修了後、昭和六十年から函館キャンパスに助手として採用されて、平成十八年から岩見沢キャンパスに勤めています。

Q 本キャンパスの学生について、どのような印象をお持ちでしょうか?

A 芸術とスポーツに特化したキャンパスであるためか、「何かを極める」という目的意識のはっきりとした学生が多いように感じます。私は全専攻の学生を対象とした「身体」という講義を担当していますが、スポーツの専門的な話題に対しても、音楽や美術、ビジネスの学生が興味を持って積極的に授業に参加してくれていることが印象的です。岩見沢キャンパスは、いろいろなことに興味を持てる好奇心のある学生が集まっていると感じています。また、元気なあいさつのできるフレンドリーな学生たちだと、来校した外部の方たちからも評判です。

Q 岩見沢校のキャンパス長になられての抱負をお聞かせください。

A キャプテンのようにグイグイ引っ張っていくのではなく、マネジャーのように周りとの調和を大事にしながら大学をまとめていきたいと考えています。どの専攻にも分け隔てなく、大学全体がより良くなるよう努めていきたいと思います。

Q 音楽・美術・スポーツ・ビジネスの四つの専攻を持つ岩見沢校のこれからについてどうお考えでしょうか?

A 新学科になって四年間がたった今、これからキャンパス全体として、ワンステップ進んでいかねばならないと考えています。「芸術、スポーツという〝文化〟をどう研究し、どのように地域に役立てていけるのか?」という課題を、学科全体で考えていける環境づくりを岩見沢キャンパスは行っていきます。プレーヤー、マネジャー、コーチといった、さまざまな選択肢を実践していける環境になればと思います。また、地域の人々にどのようにパフォーマンスを見せるのか、研究を地域にどう還元していくかという点も、大きな課題です。その中でビジネス専攻は、各専攻と関わり合いながら、大学と地域につなげていく重要なポジションを担っていると考えています。

本校が主催する「あそびプロジェクト」、「バルシューレ北海道」、「地域プロジェクト」などの地域と関わるイベントや授業も引き続きやっていきます。岩見沢という地域性を活かしながら、学生が専攻の垣根を越えて活動していける環境を深めていきたいと思っています。

Q 本キャンパスの学生に向けたメッセージをお願いします。

A ツールとしての芸術とスポーツというものを、文化として捉え、どう育成していくかを、四年間でまず学んでほしいと思います。そして卒業後の人生の中で、スポーツをする楽しさや、芸術活動を行う楽しさ、自分のしてきたことの良さを発信できる人になっていってほしいです。「発信すること」はプレーヤーという立場だけではなく、指導する立場、企画をする立場であっても大切なことです。発信をしていくための蓄えを、大学四年間の青春を懸けて、培ってほしいと思っています。

インタビュアーの声

キャンパス長室にお邪魔するのは大変緊張しました。入学して5年になりますが、入ったことの無い教室や知らないことが岩見沢キャンパスにはまだまだたくさんあります。志手先生、丁寧なご回答ありがとうございました!

津田 光太郎（つだ こうたろう）
大学院教育学研究科・教科教育専攻・美術教育専修・絵画分野1年

Hello! 新任の先生方

平成30年4月以降に教育大にいらっしゃった先生方に、下記の項目にお答えいただきました!

1出身地　2出身大学・学部　3前職　4学生のときにしておくと良いと思うこと　5教育大生の印象または赴任したキャンパスの印象

読者のほとんどが大学院生ではないので、2ではあえて出身学部を伺っています。

浅野 千恵（あさの ちえ）先生

札幌校・教授
生活創造教育専攻［被服学］

1広島市生まれ　2奈良女子大学・家政学部（現在、生活環境学部）出身です。　3前職では、名古屋女子大学で現在の倍程度のコマ数の授業をしていました。　4「学生だからこそできる」というものを見つけてください。　5本学の学生は、地域性や専門性によるところも多いのでしょうか、少しおっとり?しつつ、全体的に素直で誠実な印象を持ちました。

菅原 利晃（すがわら としあき）先生

札幌校・准教授
言語・社会教育専攻［国語科教育学］

1恵庭市生まれ札幌育ち道産子3代目　2北海道教育大学教育学部札幌分校小学校教員養成課程国語国文学科（OBです。とことん付き合います）　3公立・私立の中学校・高校　4今のうちに旅行を（写真はアンコールワット）　5いつも笑顔→お菓子→親しげ→元気→生真面目→めんこい→ いいね!→寝坊するな→仲がいい（戻る）希望含む。

中島 寿宏（なかじま としひろ）先生

札幌校・准教授
芸術体育教育専攻［体育科教育学］

1札幌市生まれ北広島市育ち　2北海道教育大学札幌校・インディアナ大学大学院　3ポーランド・アメリカ・札幌で中高の教員、北海道科学大学・藤女子大学で大学教員　4留学やボランティアなど自身にとって大きなチャレンジをしてほしいです。　5勉強や課外活動などに積極的に取り組んでいて学内の活気を感じます。

池田 考司（いけだ こうじ）先生

札幌校・講師
言語・社会教育専攻［社会科教育］

1札幌市厚別区　2明治大学政治経済学部政治学科　3北海道立高校教諭（6校に勤務）　4失敗も含めた、たくさんの出会い・体験と学び　5教師って大変そうと思っている人が多いと思いますが、教師の魅力や可能性を伝え話し合えればと思っています。

西川 竜矢（にしかわ たつや）先生

旭川校・准教授
国語教育専攻［書写書道教育・書道］

1旭川市生まれ、旭川市育ち　2北海道教育大学旭川校　3高校教員　4何かに本気になって取り組むことと、本気で遊ぶこと（遊ぶとは暇つぶしのことではなく、自分の価値観を揺さぶることです）。あいさつ・身だしなみ・他者への感謝の気持ちを持つなど、当たり前のことを身に付けておくこと。　5校内がピカピカで驚きました。学生はおとなしいような。

谷地元 直樹（やちもと なおき）先生

旭川校・准教授
数学教育専攻［数学科教育］

1旭川市　2北海道教育大学旭川校（母校です）　3公立中学校教諭、教育大学附属旭川中学校教諭　4学生同士や先生方とたくさん話して、いろいろな考え方に触れることだと思います。　5明るく優しい学生が多く、いつも助けられています。廊下が長いので、運動不足解消にもなっています♪

金 鉉善（キム ヒョンソン）先生

函館校・講師
地域協働専攻［法学・民法］

1韓国（京畿道生まれ、ソウル育ち）　2広島大学法学部　3広島大学大学院の研究員　4旅に出ること、仲間とはしゃぐこと、何でもいいので1つの研究に没頭すること。　5普段は静かでおとなしいですけれども、いざというときには情熱的になる学生が多いので、そのギャップが最高です。協力して最高のキャンパスライフを過ごしましょう!!!

安井 智恵（やすい ともえ）先生

教職大学院（釧路校）・准教授
高度教職実践専攻［学校経営学、教育行政学］

1千葉県山武市　2筑波大学芸術専門学群　3岐阜女子大学教員　4夢中になって何かに取り組んでみてください。そのことが必ず力になります。　5素朴で真面目な印象です。

杉本 任士（すぎもと ただし）先生

教職大学院（函館校）・准教授
高度教職実践専攻［学級・学校経営］

1札幌市　2弘前大学教育学部小学校教員養成課程　3北海道公立小学校の教諭を20年間勤めました。全ての学年を担任し、特別支援（通級指導教室）を担当した経験があります。　4ゼミ、サークル、ボランティア、バイトなどで責任のある立場を経験してほしいです。　5真面目な学生が多いと思いました。特に廊下で会った時にあいさつをしてくれる学生は素敵です。

保健管理センター発

セクシュアル・ハラスメント

セクシュアル・ハラスメント（いわゆるセクハラ）という言葉が日本で使われるようになって30年近く経ちました。
しかし、いまだにセクハラに関する報道をよく目にします。セクハラとは何かをもう一度整理しておきましょう。

セクハラとは

企業内や学校内等での、権力的な上下関係により行われる性的な言動と、それにより、行為を受けた側が苦痛・不快感を伴うことや就業環境・学習環境などが悪化することを指します。一般に男性が加害者、女性が被害者となりやすいですが、「男のくせに」などの性別による差別的言動も含みますので、女性が加害者、男性が被害者という場合もありますし、同性同士でも起こり得ます。簡単に言うと、セクハラとは性的嫌がらせのことです。ちなみに大学生のセクハラ被害は教員からだけでなく、学生間やバイト先でも起こることが多いです。

セクハラの分類としては「対価型」セクハラと「環境型」セクハラに分けることができます。「対価型」とは性的言動への拒否により修学上の不利益を受けることです。例えば、指導教官に性的関係を迫られ、断ると論文指導をしてくれなくなった場合がその典型です。「環境型」とは性的言動で修学上の環境が害されることです。例えば、研究室にヌードポスターが張ってある、あるいは通り過ぎるたびに肩を触られる、などが該当します。

被害を受けた側の主観を重視

セクハラを定義する上で忘れてはならない点は、「受けた側の主観を重視し、加害者にそのつもりがなくても成立する」ということです。つまり、加害者側がいくら「冗談のつもりで言っただけで、セクハラをするという意図はなかった」とか「全体の文脈を考えるとあの発言はセクハラには相当しない」などと弁明しても意味がない、ということです。

コミュニケーションは発信者の「意図」を受信者がどのように「体験」するのかによってその性質が決まります。もし発信者の意図（冗談を言って笑わせたい）が受信者の体験（面白いことを言う人だ）と一致するのならば、そのコミュニケーションには何の問題もありません。しかし、冗談という意図がセクハラとして体験された場合は大きな問題になるのです。

セクハラだと言われたら

これは加害者とされた側からすると、非常に理不尽に思われるかもしれません。Aさんには同じ発言をしてもセクハラと言われなかったのに、Bさんにはセクハラだと非難されたのはおかしいと思うかもしれません。Bさんが大げさすぎるとか、冗談の分からない人だとか、またはBさんの方から誘ってきたのだと思うかもしれません。

しかし、覚えておいていただきたいのは心の悩みや苦しみというものは本来主観的なものなのです。さらに苦しんでいても、加害者側にやめてくださいと言えないことの方が多いのです。Aさんは苦しんでないのだからBさんも苦しむべきではないと主張するのは意味のないことです。セクハラと指摘されたら、素直に謝り、同じ言動をしないことをお勧めします。

セクハラの相談を受けたら

もし被害を受けている友人から相談を受けた場合は、決して友人の非を責めないでください。被害者は必ず自分を責めているものだからです。相手の話を否定せずに最後までじっくり聴いたら、保健管理センターや人権相談員を紹介してあげてください。

（保健管理センター・カウンセラー・三上（みかみ） 謙一（けんいち））

INFORMATION

北教大生の未来を支援します

北海道教育大学基金は、平成18年12月に創設され、企業・団体、同窓会、後援会、本学教職員など、多くの方々からご寄付をいただいております。その基金を元に、教師を目指す、あるいは地域社会のさまざまな分野で活躍しようと勉学に励む学生を支援するさまざまな事業を実施しています。

育英事業　成績が優秀な学生に対する奨学金の給付

平成30年度
学部学生15人、大学院生10人に1人10万円の奨学金を給付しました。

育英事業奨学金授与式（H30.7.19）

表彰事業　課外活動、学術等の成果が特に顕著な学生、ボランティア活動等の社会活動において優れた評価を受けた学生等に対する表彰

平成29年度
学業成績優秀者16人、その他の表彰5人に表彰状および記念品を贈呈しました。

学生表彰式（H30.3.19）

修学支援事業　経済的理由により修学困難な学生に対する授業料の減免および奨学金の給付ならびに学生の海外留学に係る渡航費用の一部補助

●奨学金の給付（前期・後期）

平成30年度前期
学生5人に1人10万円の奨学金を給付しました。
※後期も同様に給付予定。

●海外留学支援

平成30年度
学生5人に1人10万円（上限額）を補助します。
※海外留学へ出発する学生を対象として選考（10月～11月頃）の上、海外留学時に給付します。

詳しくは、ホームページをご覧ください。　北海道教育大学基金　検索

未来を築こう。北教大古本募金

皆さんが読み終えた書籍等を提供いただくと、その買取金額が「北海道教育大学基金」に寄付され、育英事業等に役立てられます。ホームページからの申し込みに加え、各キャンパスに回収ボックスも設置しています。

北教大古本募金　検索

不要となった書籍、CD、DVDなどの寄付をお待ちしています!

《回収ボックス設置場所》

札幌　講義棟1階（北洋銀行ATM向かい）
旭川　中央棟1階（事務室入口の横）
釧路　学生ホール
函館　附属図書館（入口の横）
岩見沢　附属図書館（入口の横）

学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局から

編集後記

▶第29号の編集にご協力くださいました学外・学内の皆さま、誠にありがとうございます。編集局長の岩見沢校・宇田川 耕一です。

▶今回の特集テーマは「面白いこと、やっています。」です。北海道教育大学に真面目で硬いイメージを持っている方は多いのではないでしょうか。ですが真面目は真面目でも、面白いことも大真面目にやる大学、それが北海道教育大学なのです。

▶第28号からスタートした巻頭特集「夢に向かって走れ！　希望を胸に日々活動する教育大生たち」は、今回は「道北篇」と題して、旭川校を取材しました。

▶編集局の学生スタッフのうち、札幌校の天野 美代子さん、函館校の佐々木 柚香さん、濱田 亜弓さん、堀江 音名さんが前号で退任しました。大変お疲れ様でした。

▶今号から新たに、札幌校の関口 実子さん、山縣 まる子さん、旭川校の川村 風花さん、杉森 琉奈さんが学生スタッフに、旭川校の今村 彰生先生が編集局員に就任されました。新メンバーの活躍にもご期待ください。

感想・意見・要望・情報・アイデア募集中！
イラスト・写真・その他の投稿も歓迎

▶○○の活躍を取り上げてほしい、○○が面白そうなので取材してみては？　など、本誌についてのご意見・ご要望などをお寄せください。可能な限り掲載させていただきますので、下記の編集局のメールアドレスまでお知らせください。

▶本誌の各ページを飾る「らくがきイラスト」も、随時募集しています。各キャンパスの編集局員の先生方に渡してください。
その他、写真やイラストなどの画像、書・絵画・彫刻・工芸などの作品を写した写真の投稿も歓迎します。画像ファイル（拡張子がjpg）を添付したメールを、編集局のメールアドレスまでどうぞ。

ご意見・ご感想・ご要望を編集局にお寄せください！
landscape@s.hokkyodai.ac.jp